# 現代日本語の複合形容詞・派生形容詞・畳語形容詞について

田　村　泰　男

## 1．はじめに

語は、一つの語基[1]から成る単純語と、一つの語基に一つ以上の語基或いは接辞が結合してできた合成語の二つに大別することができ、合成語はさらに、一つの語基に他の語基が結び付いた複合語と、接辞が結び付いた派生語、同一の語基が結合した畳語[2]に分けられる。

玉村（1988）[3]では、合成語を次のように分類している。

- 合成語
  - 複合語
    - 純複合語
      - 並列複合語（やまかわ・尾ひれ）
      - 統語複合語（やまがわ・尾びれ）
    - 準複合語（きのこ・食わず嫌い・お気に入り）
  - 派生語（おしろい・春めく・美しさ）
  - 畳語（山々・泣く泣く・ひそひそ）

これらの分類は、形容詞にも当てはめることができ、本稿では合成によってできた形容詞[4]をそれぞれ、複合形容詞、派生形容詞、畳語形容詞と呼び、その語構成と意味について考察を進めることとする。なお、ここでは形容動詞の類は含めない。

## 2．複合形容詞

### 2.1.　複合語について

複合語には、複合名詞（山道、日暮れ）、複合動詞（食べ始める、食べ終わる）、複合助動詞（だろう、でしょう）、複合形容詞（幅広い、目新しい）、複合形容動詞（気長、手近）、複合副詞（前もって、思う存分）、複合助詞（によって、に対して）などがあるが、この中で最も数が多いのは複合名詞であり、次に複合動詞が続く。複合形容詞は複合名詞に比べると、語彙数がだいぶ少ないが、これは、新たに形容詞を作る際には、複合という手段の造語力がそれほど強くないためと考えられる。

### 2.2.　複合形容詞の語構成

複合形容詞は、その語構成によって分類すると、（1）名詞＋形容詞（2）形容詞の語幹＋形容詞（3）動詞の連用形＋形容詞の三つのグループにまとめることができる。このうち語彙数の多いものは（1）のタイプである。

（1）名詞＋形容詞

このグループに属する複合形容詞には、前項の名詞と後項の形容詞が主語と述語の関係にあるもの（末恐ろしい、幅広い）が多く見られ、前項の名詞には、「心」「気」「口」「耳」「目」など精神や身体を表す語が来ることが多く、後項の形容詞には、「臭い」「深い」「強い」「高い」などが来ることが多い。形容詞のうち、「臭い」は、前項のにおいを表す場合と、意味が転じて「いかにもそう感じられる」といった意味を表す場合があり、後者の場合は、形容詞を作る接辞として扱い、派生語のところに含めるのがふさわしいように思われるが、本稿においては、一括してここに挙げることにする。

また、「程近い／程遠い」のように反意語があるものは少なく、「気強い／気弱い」にしても「気弱な」を使うのが普通であろう。

（あたらしい）事新しい／耳新しい／目新しい、（いい）格好いい、（いたい）片腹痛い、
（うすい）幸薄い、（うるさい）口うるさい、（うるわしい）見目麗しい、
（おおい）数多い／残り多い、（おしい）口惜しい／名残惜しい／残り惜しい、
（おそろしい）末恐ろしい、（かたい）義理堅い／口堅い／底堅い、（かゆい）歯がゆい、
（からい）塩辛い／世知辛い、（きたない）意地汚い／口汚い／腹汚い、
（くさい）青臭い、汗臭い、いんちき臭い、胡散臭い、嘘臭い、男臭い、金臭い、
かび臭い、きな臭い、けち臭い、熟柿臭い、素人臭い、辛気臭い、乳臭い、血生臭い、
土臭い、泥臭い、生臭い、人間臭い、馬鹿臭い、バタ臭い、人臭い、のろ臭い、
貧乏臭い、古臭い、分別臭い、仏臭い、抹香臭い、水臭い、面倒臭い
（くらい）後ろ暗い／木暗い、（くろい）腹黒い、（くるしい）息苦しい／心苦しい／
胸苦しい、（こい）色濃い、（こいしい）人恋しい／人肌恋しい、（さとい）耳ざとい
／目ざとい、（さびしい）口寂しい／心寂しい、（さむい）肌寒い、
（すくない）数少ない／頼み少ない／残り少ない、（せわしい）気ぜわしい／心ぜわしい、
（たかい）香り高い／勘定高い／計算高い／そろばん高い／名高い／馬鹿高い／誇り高い
／物見高い、（ただしい）行儀正しい、（たのもしい）末頼もしい、（ちかい）程近い／
間近い／身近い、（つよい）奥強い／我慢強い／気強い／心強い／勝負強い／辛抱強い
／力強い／根強い、（でかい）馬鹿でかい、（とおい）縁遠い／程遠い／耳遠い、
（なつかしい）人懐かしい／昔懐かしい、（にくい）心憎い／小面憎い／面憎い、
（はずかしい）気恥ずかしい／花恥ずかしい、（はやい）気早い／目早い、
（ひろい）幅広い、（ふかい）印象深い／奥深い／毛深い／感慨深い／感銘深い／
興味深い／木深い／慈悲深い／罪深い／情け深い／根深い／用心深い／欲深い、
（ほそい）心細い、（まずい）気まずい、（むさい）じじむさい、（むずかしい）気難しい、
（もろい）涙もろい、（やかましい）口やかましい、（やさしい）心やさしい、
（やすい）気安い／心安い、（やましい）心やましい、（ゆかしい）奥ゆかしい、

（よい）程良い／見目よい、（よわい）気弱い／心弱い、（わるい）決まり悪い／行儀悪い／気味悪い／気持ち悪い／底意地悪い

（2）形容詞の語幹＋形容詞

このグループに属する複合形容詞は、A. 前項の形容詞が後項の形容詞を修飾するもの（浅黒い、薄暗い[5]）、B. 前項と後項が並列的な関係にあるもの（甘辛い、甘酸っぱい[6]）の二つに大別できるが、B. に属するものは少ない。

青黄色い、青白い、赤黄色い、赤黒い、浅黒い、暑苦しい、甘辛い、甘酸っぱい、甘苦い、痛がゆい、薄赤い、薄青い、薄明るい、薄甘い、薄暗い、薄黒い、薄白い、重苦しい、面白おかしい、堅苦しい、狡辛い、ずる賢い、狭苦しい、長細い、細長い、むさ苦しい、悪賢い

なお、「薄気味悪い」のように形容詞＋名詞＋形容詞の構造を持つものもある。

（3）動詞の連用形＋形容詞

このグループに属する複合形容詞は、前項に立つ動詞の動作・作用を後項の形容詞が修飾する関係にあるものがほとんどである（疑り深い－深く疑う、粘り強い－強く粘る）。

疑り深い、恐れ多い、考え深い、聞き苦しい、焦げ臭い、慎み深い、照れ臭い、なじみ深い、寝苦しい、粘り強い、回りくどい、回り遠い、見苦しい、見よい、蒸し暑い

以上、複合語を3グループに分けて見てきたが、この他、数は少ないが、「ひょろ長い」「むずがゆい」のように「擬態語の語基＋形容詞」型のものや、「ちゃんちゃらおかしい」「だだっ広い」のように、強意を表す副詞的要素と結び付いてできた複合形容詞もある。

## 3．派生形容詞

派生形容詞は、接辞の付加によってできたもので、（1）接頭辞＋形容詞（2）語基＋接尾辞の二つに大別でき、接辞の造語能力はそれほど高くない。

（1）接頭辞＋形容詞

この結合形式による形容詞は語彙的に固定したものがほとんどで、造語能力は極めて低い。また、接頭辞が付加されても語の品詞は変わらず、文法範疇の変更はない。

1.「あた」　あたしおっからい
2.「いけ」　いけずうずうしい、いけ好かない
3.「うそ」　うそ寒い
4.「うら」　うら悲しい、うら寂しい、うら恥ずかしい、うら若い
5.「お」　お寒い　お安い　お高い
6.「か」　か弱い、か細い、か黒い、かやすい
7.「け」　気高い、気怠い、気疎い
8.「こ」　小うるさい、小汚い、小気味よい、小暗い、小賢しい、小高い、小憎らしい、小（っ）恥ずかしい、小難しい
9.「こっ」　こっぴどい
10.「ず」　図太い
11.「しち」　しち難しい、しち面倒臭い
12.「す」　素早い
13.「そら」　空恐ろしい、空恥ずかしい、空悲しい
14.「た」　たやすい
15.「て」　手厚い、手荒い、手痛い、手堅い、手厳しい、手強い、手ぬるい、手早い、手ひどい、手広い
16.「ど」　どえらい、どぎつい
17.「どす」　どす黒い
18.「なま」　生白い、生暖かい、生ぬるい
19.「の」　野太い
20.「ひ」　ひ弱い　ひだるい
21.「ほの」　ほの白い、ほの暗い
22.「ほろ」　ほろ苦い
23.「ま」　真新しい、真っ黒い、真っ白い
24.「もの」　物憂い、物恐ろしい、物悲しい、物寂しい、物騒がしい、物凄い、物凄まじい、物足りない、物珍しい

（2）語基＋接尾辞

ここに含まれる語彙には、動詞からの派生語(勇ましい、いらだたしい、嘆かわしい、悩ましい、ねたましい、のろわしい、腹立たしい、喜ばしい)や形容詞からの派生語(近しい、危なっかしい)、若者語[7]として使われ始めた名詞からの派生語(今い、いもい)、外来語からの派生語（ナウい、エロい）などとともに、次に挙げる接尾辞が付加された派生形容詞がある。このうち「ぽい」や「らしい」など一部の接辞を除いて、造語能力は低く、結び付く語基が限られていたり、語彙的に固定されたものが多く見られる。

1．「いい」

扱いいい、書きいい、住みいい、飲みいい、履きいい、走りいい、引きいい

2．「がたい」

受け入れ難い、動かし難い、得難い、信じ難い、救い難い、耐え難い、絶ち難い、近寄り難い、尽くし難い、つけ難い、理解し難い、忘れ難い

3．「がましい」

恨みがましい、押しつけがましい、恩着せがましい、差し出がましい、晴れがましい、人がましい、未練がましい、わざとがましい、

4．「がわしい」

みだりがわしい

5．「ぐましい」

涙ぐましい

6．「こい」

油っこい、しつこい、滑っこい、粘っこい、人懐っこい、冷やっこい、まだるっこい、丸っこい、やにっこい

7．「たい」

後ろめたい、煙たい、冷たい、眠たい、めでたい、

8．「たらしい」

嫌みたらしい、自慢たらしい、長ったらしい、憎たらしい、貧乏ったらしい、未練たらしい、むごたらしい

9．「づらい」

歩きづらい、食べづらい、飲みづらい、攻めづらい、話しづらい、見づらい、読みづらい、理解しづらい、分かりづらい

10．「ない」

飽き足りない、危なげない、がんぜない、心ない、この上ない、仕方ない、所在ない、如才ない、せわしない、詮方ない、詮ない、造作ない、素っ気ない、絶え間ない、大差ない、大事ない、頼りない、たわいない、つつがない、つまらない、情けない、何気ない、並びない、煮え切らない、似気ない、計り知れない、面目ない、申し訳ない、もったいない、やるせない、やるかたない、余儀ない、よんどころない

11．「にくい」

歩きにくい、覚えにくい、書きにくい、攻めにくい、食べにくい、使いにくい、取れにくい、流れにくい、飲みにくい、見にくい、読みにくい、割れにくい

12．「ぽい」

飽きっぽい、荒っぽい、哀れっぽい、いがらっぽい、色っぽい、えがらっぽい、怒りっぽい、男っぽい、きざっぽい、黒っぽい、子供っぽい、湿っぽい、白っぽい、

俗っぽい、艶っぽい、とっぽい、熱っぽい、ほこりっぽい、骨っぽい、水っぽい、安っぽい、忘れっぽい

13.「ぼったい」

厚ぼったい、腫れぼったい

14.「めかしい」

今さらめかしい、なまめかしい、古めかしい

15.「やすい」

飽きやすい、歩きやすい、怒りやすい、変わりやすい、感じやすい、与しやすい、壊れやすい、外れやすい、引きやすい、見やすい、燃えやすい、読みやすい

16.「らしい」

あほらしい、いやらしい、男らしい、子供らしい、大層らしい、憎らしい、馬鹿らしい、誇らしい、分別らしい、勿体らしい、もっともらしい、わざとらしい

## 4．畳語形容詞

畳語形容詞とは、同一語基を重ねたものに接辞「しい」が付加されたもので、形容詞の語幹を重ねたもの（荒々しい、痛々しい）、名詞を重ねたもの（刺々しい、華々しい）、動詞の語幹を重ねたもの（馴れ馴れしい、晴れ晴れしい）、接頭辞を重ねたもの（初々しい）などがあるが、動詞によるものはあまり多くない。これらの語は、いずれも話者の情意を表しており、重複前と比べると意味的分化が見られる

荒々しい、痛々しい、忌々しい、初々しい、雄々しい、おどろおどろしい、重々しい、角々しい、軽々しい、仰々しい、くだくだしい、くどくどしい、神々しい、事々しい、白々しい、騒々しい、空々しい、猛々しい、毒々しい、刺々しい、長々しい、生々しい、馴れ馴れしい、苦々しい、賑々しい、憎々しい、はかばかしい、馬鹿馬鹿しい、映え映えしい、華々しい、晴れ晴れしい、美々しい、福々しい、ふてぶてしい、古々しい、まがまがしい、まめまめしい、瑞々しい、女々しい、物々しい、よそよそしい、弱々しい、麗々しい、若々しい

## 5．結語

最後に、本稿で明らかになったことを記してまとめとしたい。

1）新しい形容詞を生産するための手段としては、複合は造語能力が低い。

2）複合形容詞の中では、「名詞＋形容詞」型が一番多く、「形容詞の語幹＋形容詞」型や「動詞の連用形＋形容詞」型は、さほど多くない。

3）派生形容詞においては、「ぽい」「らしい」など一部の「語基＋接尾辞」型を除き、造語能力は低く、結び付く語基が限られていたり、語彙的に固定されたものが多く

見られる。

4）畳語形容詞は、形容詞語幹の重複形や名詞の重複形に接辞「しい」を付けたものが多く、動詞語幹を重ねたものは少ない。

注

1）語基とは、共時的観点から見て語の意味的基幹になるもので、例えば「汗ばむ」「か弱い」「お酒」の下線部が語基である。

2）意味を持たない要素が、音声上繰り返されている音象徴語（擬音語・擬態語）は畳語に含めない。同じ形式が繰り返されているだけでは畳語と認定できず、重複される前の形式が発話の中である意味を担っているということと、重複された後の形式の表す意味が重複前の意味と関連を持ちつつも意味的に分化していることが条件付けられるからである。

3）cf. 玉村（1988）「複合語の意味」『日本語学』第7巻5号明治書院 p. 24

4）玉村文郎（1997）「和語は造語力が弱いか」斎藤倫明・石井正彦（編）『語構成』ひつじ書房 p. 110に、和語の形容詞を作る成分について次のような記載がある。

1　動詞から（ねたましい　勇ましい　くだらない）
2　名詞＋形容詞（人恋しい　程遠い　毛深い）
3　動詞連用形＋形容詞（考え深い　見苦しい）
4　形容詞語幹＋形容詞（細長い　浅黒い）
5　形容詞から（近しい　白々しい　弱々しい）
6　名詞重複形から（空々しい　花々しい）
7　動詞連用形重複から（晴れ晴れしい　なれなれしい）
8　副詞語幹＋形容詞（ほの暗い　ほろにがい）

5）「浅」「薄」は、新明解国語辞典（第六版）では接頭語として扱われているが、大辞林（第二版）、広辞苑（第四版）、大辞泉（第一版、増補・新装版）にはその記載がなく、本稿ではこれらを形容詞の語基として取り扱う。なお、言泉（第一版）では、「薄」のみ接頭語としている。

6）「甘酸っぱい」については、国立国語研究所（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 p. 102に次のような記述がある。

基本的な味の形容詞がくみあわさった形の複合形容詞としては「あまずっぱい」（「あまずい」も）がある。「甘みがあってすっぱい」（広辞苑）のように「すっぱい」の下位に属する語としてみるか、甘みとすっぱみとまじった味の形容」（例解国語辞典）のように第三の味とみるか、問題がある。

この説明を勘案すれば、厳密には、「甘酸っぱい」という語彙において、「甘い」

と「酸っぱい」が対等の関係に立っているとは必ずしも言えず、どのような「酸っぱ味」であるかを「甘い」が説明する立場にある、つまり、統語構造を持つ複合語であるとも解釈できる。

7）若者によって生み出された形容詞には、省略によるものがいくつかある。
うっとい←うっとうしい、うるい←うるさい、きもい←きもちわるい、
けばい←けばけばしい、はずい←はずかしい、みずい←みずっぽい、
むずい←むずかしい、めんどい←めんどうくさい
cf. 米川明彦（1998）『若者語を科学する』明治書院 p. 52

**参考文献**


影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
国立国語研究所（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
玉村文郎（1986）「古代における和語名詞の畳語について」宮地裕（編）『論集日本語研究（二）歴史編』（pp. 220－238）明治書院
玉村文郎（1988）「複合語の意味」『日本語学』第７巻５号（pp. 23－32）明治書院
玉村文郎（1997）「和語は造語力が弱いか」斎藤倫明・石井正彦（編）『語構成』（pp. 101－116）ひつじ書房
田村泰男（2005）「現代日本語の接頭辞について」『広島大学留学生センター紀要』第15号（pp. 25－36）
竝木崇康（1988）「複合語の日英対照－複合名詞・複合形容詞－」『日本語学』第７巻５号（pp. 68－78）明治書院
原野亮子（1989）「畳語について」『九州大学留学生センター紀要』第１号（pp. 91－103）
米川明彦（1998）『若者語を科学する』明治書院

新村出（編）（1991）『広辞苑（第四版）』岩波書店
西尾実（編）（2000）『岩波古語辞典』岩波書店
日本語教育学会（編）（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店
日本語教育学会（編）（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
林大（監修）（1986）『国語大辞典言泉』小学館
松村明（編）（1995）『大辞林（第二版）』三省堂
松村明（編）（1998）『大辞泉（第一版、増補・新装版）』小学館
森田良行（1992）『基礎日本語辞典』角川書店
山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（編）（2005）『新明解国語辞典（第六版）』三省堂